

神のやま

第5号



播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会

資料1

嘉永7年(1854) 謡囃子行列の構成(数字は人数)

山の名称	東の山(二色山)	南の山(五色山)	西の山(小袖山)
山の支配村	国府寺村	宿村	福中村
付属する町村	(東の山附) 大野町 野里寺町 鍛冶町	(南の山附) 西紺屋町	(西の山附) 南畝村(町)
行列 ①	御幣持 1	御幣持 3	露払 2
②	柵持 2	笠鉾持 3	兜具足着 5
③	笠鉾持 5	車引子供 30	警固 5
④	作り物 80 田原藤太龍神鐘引	作り物 石橋人形	作り物 28 花車引子供唐子出立
⑤	笛 4	笛 3	大御幣持 2
⑥	鼓 7	鼓 6	開口謡 16
⑦	太鼓 5	太鼓 3	大小指 2
⑧	地謡 10	地謡 17	烏帽子狩衣着 1
⑨	役人 32	警固 55	笛吹 4
⑩	警固 15	人足 45	鼓 3
⑪	袴着 35		太鼓 3
⑫	力者車引人足 12		地謡 12
⑬	車引子供人足 30		花車引警固 28
⑭	囃子方附人足 12		惣警固 60
⑮			御笠鉾持 5
⑯			太鼓持 4
⑰			諸役人足 35
	計 250	計 165	計 215
参考			
正徳3年	180余	160余	190余
享保18年	190余	180余	140余

三ツ山大祭と謡囃子

播磨学研究所副所長 小栗栖 健治

はじめに―謡囃子の復活に向けて―

播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会では、二〇一八年(平成三十年)より謡囃子の復活に向け精力的に取り組まれています。三ツ山大祭(臨時祭)には二色山、五色山、小袖山と呼ばれる三つの「やま」が造られます。この大祭には、中世の伝統を伝える五種神事、「やま」で奉納される猿楽、城下町を練る謡囃子、町家を飾る造り物などがあり、こうした演出が大祭の賑わいを醸し出していました。

江戸時代、謡囃子は三つの山に付属したそれぞれの町や村から笠鉾や大型の曳き物、衣装を揃えた「子供花持」囃子、鳴り物などからなる二百人ほどの行列が登場し、人気を得ていました。明治になると、三ツ山大祭の主催が姫路藩主から神社へ、また、社会構造の変化もあって謡囃子は行われなくなりました。

謡囃子の賑わいは三ツ山大祭の古文書に記録され、また、華やかな行列は祭礼絵巻などに描き留められています。保存会ではこうした資料をもとに、行列の中心となる笠鉾・高張提灯など行列全体の道具や衣装の整備、鎧武者の武具甲冑を製作されてきました。

一方、三ツ山踊り保存会と姫路・城東連を中心に構成された百人を超える謡囃子は、二〇一九年と二〇二〇年は播磨国総社の「初ゑびす祭」の宝恵籠行列とともに氏子域を練り踊りましたが、二〇二一年はコロナウイルス感染症の流行により総社境内で新たに完成した笠鉾を背景に踊りが披露されました。謡囃子の復興は、このように着実な歩みを示しています。

一 嘉永七年「謡囃子」の行列

では、三ツ山大祭に登場する謡囃子とは、どのような行列だったのでしょうか。江戸時代に行われた臨時祭において謡囃子の行列をもっとも詳しく書き上げた、嘉永七年(一八五四)の行列を資料1に整理してみました(「嘉永七年臨時大祭礼見聞録」 姫路市立琴丘高等学校蔵)。三つの山は東の山(二色山)・南の山(五色山)・西の山(小袖山)と呼ばれ、東の山は国府寺村、南の山は宿村、西の山は福中村が支配していました。謡囃子は三つの山にそれぞれ付属し、東の山は大野町・野里寺町・鍛冶町の三町、南の山は西紺屋町、西の山は南畝村(町)が担当していました。

謡囃子の行列の構成は、東の山は①から⑭まで、南の山は①から⑩まで、西の山は①から⑰まで、それぞれの山によって多少異なっています。ただ、練り物の笠鉾、曳き物の作り物(田原藤太龍神鐘引・石橋人形・花車)、そして、囃子方の地謡など、謡囃子の中心となる要素は一致しています。東の山は二百五十人、南の山は百六十五人、西の山は二百十五人が行列を組んでいました(資料3・資料4)。

二 正徳三年「謡囃子」の行列

次に、正徳三年(一七二三)の「臨時祭礼之覚」(昭和十九年写本、播磨国総社蔵)により謡囃子の行列を示すと次のとおりです。

①東の山 笠鉾一本は国府寺村の分。上葺は浅黄の絹、水引の巻物は赤地の緞子の類い、作り花は一本。行列は百八十人余りで、神歌を歌い、囃子ながら京口御門から入ってくる。子供は狸々の出立(二十人)、笛吹(二人)、鼓打(五人)、太鼓打(二人)、笠鉾持(十二人)、地謡(二十五人)、子供の付添(二十人)、警

固(八十人)、人足(十二人余り)の行列である。謡囃子の役者は鍛冶町・野里寺町・同威徳寺町三町の鍛冶・鋳物師・紺屋が出る。

②南の山 笠鉾一本は宿村の分。上葺は赤地の絹、水引の巻物は赤地の緞子の類い、作り花は一本。行列は百六十人余りで、神歌を歌い、囃子ながら鳥居先御門から入ってくる。幣持(二人、素襖烏帽子着)、子供山伏の立出(五人)、子供花持(十九人)、笛吹(二人)、鼓打(四人)、太鼓打(二人)、笠鉾持(十人)、地謡(二十人)、警固(八十人)、人足(七人余)の行列である。謡囃子の役者は西紺屋町から出る。

③西の山 笠鉾一本は福中村の分。上葺は鬱金の絹、水引の巻物は紫色の緞子の類い、作り花は一本。行列は百九十人余りで、神歌を歌い、囃子ながら総社御門から入ってくる。幣持(一人)、風折烏帽子狩衣着(二人)、子供花持(二十一人)、笛吹(一人)、鼓打(四人)、太鼓打(一人)、笠鉾持(十二人)、甲具足着(五人)、地謡(二十人)、太鼓(二人)、警固(八十人)、人足(二十人余り)の行列である。謡囃子の役者は南畝村から出る。甲具足着の者は延末村、安田村、栗山村、飯田村の四か村から出る。これら三か村の笠鉾の下地・上葺の絹・水引の巻物は御城様からの御下賜、作り花は城下の寺々から奉納されていました。

ここには三つの「やま」に属す笠鉾の布の色や行列の構成が細かく記述されています。謡囃子の笠鉾は承応二年(二六五三)の「伊和大明神臨時祭之画図」(以下、「三ツ山祭礼絵巻」)(資料2)に描かれています。この記録から上葺に絹、水引に緞子の類いを用いていることが分かります。笠鉾の下地と上葺・水引は姫路城主からの御下賜、作り花は城下の寺々から奉納されていました。

「三ツ山祭礼絵巻」は、笠鉾を中心に鉦・笛・太鼓・鼓の鳴り物を奏する人とともに、揃いの衣装を着た子供を描いています。東の州姫路総社臨時大祭礼曳物略図・姫路城内総社臨時大祭礼略図(資料3・4 前川憲司氏蔵)は、その賑わいをよく伝えてくれます。謡囃子は中世の郷村に成立した祭礼風流だったのですが、大型の曳き物の登場は城下町姫路の都市的発展を窺わせています。

四 謡囃子の登場

では、こうした謡囃子が三ツ山大祭に登場するのは何時のことでしょうか。臨時祭に三つの「やま」が登場するのは、大永元年(一五二二)のことでした。当時の記録は、「やま」のことを「装山(かざりやま)」と記しています。大永元年の三ツ山大祭には謡囃子の記述はありません。大永二年になると謡囃子の祖型の整えられていることが分かります。池田輝政による姫路城築城以前の謡囃子について、「笠鉾」と「子供花持」を取り上げてみようと思います。

「笠鉾」は大永二年に「花飾り」、天文二年(一五三三)に「花形笠」として登場します。「子供花持」は、大永二年には村の童による「舞童(ぶどう)」として登場していました。また、「童謡・花飾り」を「十ヶ村ノ氏人」が勤めると記しています。童謡は神の意思を童の口をとおして歌わせる歌という意味、花飾りは笠鉾と推測されるものです。天文二年になると、大永二年の「童謡・花飾り」は「童謡ねり・花形笠」と書かれ、「十六ヶ村ノ民」が勤めたと書いています。さらに、練り物として歌われる「童謡」は、増位山随願寺が作るものになっていました。少ない情報ですが、中世において謡囃子は明らかに行われていました。

では、大永二年の「童謡」、天文二年の「童謡ねり」とは、謡囃子のどの人たちを指しているのでしょうか。それは前述した「三ツ山祭礼絵巻」に描かれた東の山の「子供狸々立立式拾人」、南の山の「拾九人子供花持」、西の山の「式拾壹人子供花持」と考えられることです。

山では薄紅色の小袖に緑色の帯を締めた十四人が黒の塗り笠を被り、右手に花の小枝を持ち肩に掛けています。中の山では萌葱色の小袖に朱の帯を締めた十八人が黒の塗り笠を被り、右手に花の小枝を持ち肩に掛けています。西の山では朱色の小袖の上に浅黄色の打ち掛けの小袖を重ねた十四人が赭熊を被り、右手に花の小枝を持ち肩に掛けています。

これらの子供たちは、正徳三年(一七一三)の記録に記される東の山の「子供狸々立立式拾人」、南の山の「拾九人子供花持」、西の山の「式拾壹人子供花持」にあたるものです。こうした謡囃子の行列は、神歌を歌い囃子ながら京口御門・鳥居先御門・総社御門から城内に入り、それぞれが属す山へと向かいました。

三 謡囃子の変化

謡囃子について、承応二年、正徳三年、嘉永七年(一八五四)に行われた実際を比較してみました。承応二年、正徳三年、嘉永七年の謡囃子を比較すると、承応二年と正徳三年の構成は近似していますが、それと嘉永七年を比較すると大きく異なっていることに気がきます。それは、嘉永七年には東の山に「田原藤太龍神鐘引」、南の山に「石橋」、西の山に「花車」の曳き物が登場していることです。承応二年・正徳三年の謡囃子には曳き物については記されていません。謡囃子に曳き物が登場するのは、享保十八年(一八三三)以降のことであるようです。

大型の曳き物の登場は、謡囃子の構成に影響を与えることになりました。嘉永七年の謡囃子には「花持」は登場せず、子供と結び付いた役割として東の山では「作り物 田原藤太 龍神鐘引 子供鯛・鮎・鯖・蛸ノ冠着八拾人」、南の山では「作り物 石橋人形」「車引子供三拾人」、西の山では「花車引 子供二拾八人 花笠冠」と記されています。「播

おそらくこの揃いの衣装を着した子供たちが大永二年や天文二年に登場する「童謡ねり」であったと考えられます。

童謡や笠鉾を勤めた「十ヶ村ノ氏人」(大永二年)や「十六ヶ村ノ民」(天文二年)は、『惣社集日記』に記される次の村々です。

- 平野村・大野村・白国村・野里村・八代村・国府寺村・津田野村・北条村・南条村・安田村・農年(南畝)村・伸(延)末村・福中村・中の村・山野井村・宿村

この十六の村々は国衙庄と呼ばれた地域と考えられています。播磨国総社は国衙庄の鎮守社で、これらの村々が中世の氏子域であったと推測しています。城下町が成立することによって総社の氏子域は変化していました。

おわりに―城下町の成立と謡囃子―

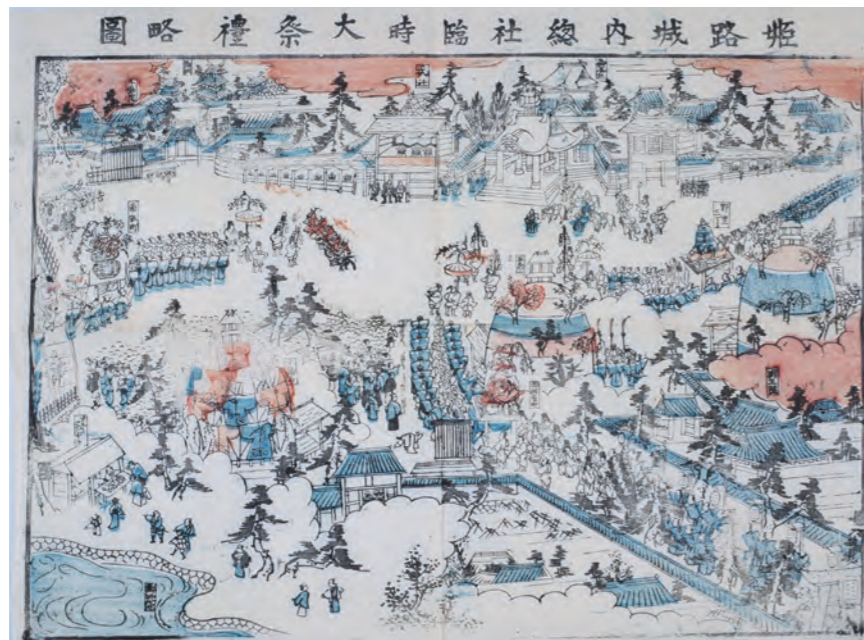
謡囃子は三ツ山大祭とともに成立した風流の一つでしたが、姫路が村から城下町へ展開する中でその姿を変えてきました。当初は国衙庄の村々が担当していましたが、池田輝政による姫路城の築城によりその担い手は基本的に城下の町々へと変わりました。中世以来の謡囃子の形式は基本的に江戸時代中期まで受け継がれていましたが、享保十八年(一七三三)に大型の曳き物が登場すると、華やかさの中心は「子供花持」から「花籠」など大型の曳き物へと移りました。

城下町の発展と結びついた謡囃子でしたが、残念ながら明治に入ると、その伝統は途絶えてしまいました。保存会による謡囃子復興の取り組みが、多くの方の気持ちを一つにした、裾野の広い活動になることを期待しています。

資料3 播州姫路総社臨時大祭礼曳物略図 (前川憲司氏蔵)



資料4 姫路城内総社臨時大祭礼略図 (前川憲司氏蔵)



資料2は承応2年(1653)の臨時大祭礼を描いた絵巻。姫路城主榊原忠次によって総社に奉納された。姫路市指定文化財。資料3と資料4は嘉永7年(1854)に行われた臨時大祭礼(三ツ山大祭)に際して版行された刷り物。資料3は、上段に「野里大の町・野里寺町・かじ町」、中段に「紺屋町」、下段に「のふねん町」と記す。資料4は、神門前の三ツ山にそれぞれの謡囃子の行列が集合した情景を捉えている。配置は、右から二色山・五色山・小袖山。

資料2 伊和大明神臨時祭之画図 (姫路市立城郭研究室蔵)



①東の山(二色山)の謡囃子



②南の山(五色山)の謡囃子



③西の山(小袖山)の謡囃子

令和二年度 保存会活動報告

令和二年度役員会

例年、七月に開催しています役員会ですが、令和二年度は新型コロナウイルス感染拡大により、役員会を止む無く中止とさせていただきます。

役員の皆様には、書面議決として役員会資料を郵送し、令和元年度事業報告、令和元年度収支決算書、令和二年度事業計画、令和二年度収支予算書の各議案を審議いただき、書面表決書により可決となりました。

大傘製作学習会

(令和二年八月五日～九月十日)

今年度のメイン事業となる大傘製作学習会を、令和二年八月五日から九月十日までの間、十回に亘り実施しました。

播磨国総社の一ツ山大祭・三ツ山大祭は、神門の前に壮大で華麗なお山が造られます。

江戸時代の記録によると、それぞれの山は総社の氏子域三つの村の担当によって管理され、五種神事や能楽の芸能にも携わっていたそうです。

「伊和大明神臨時祭之画図」には、城下の町々から繰り出された「謡囃子踊」の集団が、花傘(大傘)を持ち、鎧武者、鉦と太鼓の囃子、笛・鼓・三味線、華麗な衣装を着て花枝をもつ子供たちと共に、三ツ山まで練りこむ姿が見受けられます。

骨に張り付ける素材は布が適していると判断し、和裁洋裁を得意とする女性陣を中心に、型紙の作成、布の切り出し、縫い付けと、学習会以外の日にも集まってもらい製作がすすめられました。最後の二日間で、大傘の華となる造花の取り付けが行われました。これも、女性陣のセンスにより、大傘の色に映える美しい装いとなりました。完成したばかりの大傘と共に、参加者全員で記念撮影を行いました。暑い時期の学習会でしたが、参加者の達成感に溢れた爽やかな笑顔が伺えました。



令和元年に復興した「謡囃子」ですが、大傘は一差用意出来ただけでした。そこで今回はこの謡囃子のシンボルと言える、「大傘」二差を制作したいと考えました。

前回の三ツ山大祭の際に、各団体が造る造り物の製作指導にあたっていただいた、ものづくり作家 どのよしのぶ氏に、特別にご指導いただけることになりました。

大傘の基本構造、骨に張り付ける素材の選定、傘を立てる台の製作図面、製作手順、製作指導など細部に亘りご指導をいただき、製作にあたりました。

製作は素材の下地処理から始まり、材の切り出しやサンダーで微調整をしながら部材を作成し、組み立てたのちに塗装していききました。



播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会特別講演会 播磨国総社神門修造記念講演会

(令和二年十月三日)

令和二年の役員会が中止となり、延引していましたが特別講演会を、令和二年十月三日に総社会館にて、防疫対策を含め、ソーシャルディスタンスを確保して開催しました。

総社では令和二年の春より神門の修造事業が進められており、霜月の竣工に先立っての記念講演会となりました。

講師に播磨学研究所副所長 小栗栖健治氏(当会オブザーバー)をお迎えし、「三ツ山大祭と謡囃子―郷村の祭礼から城下町の祭礼へ―」の講演をいただきました。

総社の一ツ山大祭はご祭神のご鎮座の由縁により、丁卯大祭礼と呼ばれました。一方、三ツ山大祭は臨時祭としての性格を持つなど、祭礼の由来、時代別の三ツ山大祭に見られる謡囃子行列の構成など、大変興味深いお話を聴くことができました。聴講された四十名余の方々、真剣に聞き入っていました。



小袖山に飾る小袖の陰干し

(令和二年十月五日)

毎年恒例となりました小袖の陰干しを、十月五日に総社境内にて行いました。

三ツ山大祭の小袖山に飾る小袖を、当会田中会長をはじめ、オプザーバーの先生、会員の方々約二十名のご奉仕をいただきました。

色とりどりの小袖が境内に並べられ、約二〇〇領の陰干しが出来ました。

小袖山には約八五〇領の小袖が必要となります。

令和十五年の三ツ山大祭に向けて、皆様からのご寄進をお待ち申し上げます。



内に繰り出し、舞台前で『わ』になって、観客の声援を受けながら、賑々しいものになりました。



最後になりましたが、このような時代(世情)に上演することが出来ましたのは、関係各位のご協力によるものと、心より感謝申し上げます。



謡囃子写真展

(令和二年十月一日〜十月三十日)

令和二年の一月十四日に実施しました「謡囃子」の写真展を、播磨国総社御門二階にて開催しました。

今回の写真展では謡囃子の写真ほか、行列の道具などの展示に加え、大傘製作学習会で完成した大傘や、昨年度作製した鎧なども展示しました。



総社境内長生殿での謡囃子

(令和三年一月十六日)

本年で三回目を迎える謡囃子。本年は姫路の街へ繰り出す謡囃子行列は世情を鑑み中止となりましたが、大傘や謡囃子の事を播磨地域の方々知って頂きたいという想いから、総社境内に特別舞台を設ける事にしました。

学習会で出来上がった手作りの大傘も三差し揃い、舞台に花を添えました。

特別上演では、三ツ山踊り保存会、姫路・城東連、香寺太鼓の三団体の上演からなるステージを計三回披露しました。

香寺太鼓の熱気溢れる演奏で、参拝者の視線を一気に舞台へ集めました。

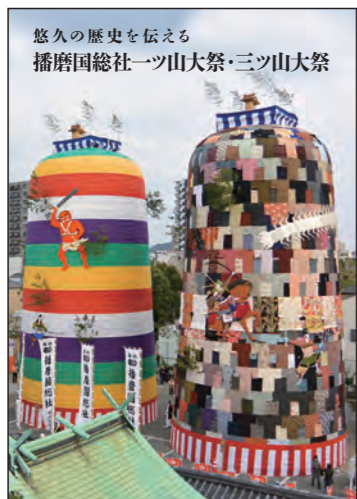
三ツ山踊り保存会、姫路・城東連の演舞は、ステージから境

令和三年度 保存会事業予定

- 一、調査・研究事業 会報誌第六号発行
- 二、研修会・講演会事業 記念講演会
謡囃子曳き物づくり
学習会の実施
- 三、会議 役員会
- 四、その他関連事業行事等 小袖の陰干し
謡囃子写真展
謡囃子の実施

「悠久の歴史を伝える 播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭」好評頒布中!

一ツ山大祭・三ツ山大祭のすべてがわかるこの一冊!
一冊三〇〇円 播磨国総社にて





発行 令和3年3月31日
発行所 播磨国総社 一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会
姫路市総社本町190播磨国総社射楯兵主神社内
☎ 079-224-1111 fax 079-224-1114
E-mail hozonkai@sohsha.jp HP <http://sohsha.jp>

播磨国総社 三ツ山祭礼図屏風
兵庫県立歴史博物館蔵 兵庫県指定重要有形文化財